

先人の知恵から

47

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「ナ行～ノ行」から以下の10個。
引き続き飛ばし気味で書いていきます。最後まであと少し、どうぞお付き合いください。

- 習うより慣れよ
- 握れば拳 開けば 掌こぶし てのひら
- 二度教えて一度叱れ
- 人間到る処青山有りせいざん
- 人間万事塞翁が馬ばんじさいおう
- 忍の一字は衆 妙の門しゅうみょう
- 猫に鯉節
- 鼠 壁を忘る壁鼠を忘れずねずみ
- 寝る子は育つ
- 喉元過ぎれば熱さを忘れるのどもと

＜習うより慣れよ＞

あらたまって人から学んで習得するよりも、実際に経験を積んで、体で慣れて会得する方が、しっかりと身につくということ。また、机上の学問だけでは不十分で実地の経験が大切だということ。「亀の甲より年の功」は類語。

これは、今どきのインターネットに頼り気味な子どもたちや保護者に伝えている諺。やってみなければわからないことも多いし、やってみたほうが学びは多い。失敗が怖いから何でもネットで調べる。その結果、やる前から「大変そう」「難しそう」といってやろうとしない子ども、大人がいる。調べることも大事だが、やってみると意外と簡単だったなどということも多々あるので、まず

はやってみようという気持ちを持てるように、この諺を伝える。

一部の子どもは人から教わるのが嫌だというので、それなら猶更自分でやってみようとする。習うのは厭と言いながら、結局はネット情報を習っているということに気づかないから。

英語では・・・

Custom makes all things easy. (慣れれば万事容易になる。)

Practice makes perfect. (経験を積むと完全になる。)

<握れば拳開けば掌>

物事は、気持ちや状況しだいで変わることのたとえ。同じ手でも、握れば人を殴る拳となり、開けば人をなでる掌になるということから。

これはリフレーミングでもある。最近、多角的に物事を捉えるとか俯瞰して物を見るなどということが苦手な子どもや大人に出会うことが増えた。まあ、子どもにとって俯瞰的とか多角的などというのは難しいのかもしれないが、高校生や大学生であればある程度可能なはずである。右といえば右、白と黒の間の灰色の存在を無視するなど、単眼的な見方をしていると、解決策もなかなか見つけれないだろう。そんな子どもや大人にこの諺を伝えている。手だっていろいろな見方、使い方があってのだから、自分の周りの人間関係であっても、同じように見方を変えてみてはどうか、そうすれば人間関係の悩みが少し解消するのではないだろう

うかという思いを込めて。

<二度教えて一度叱れ>

過失に対して頭からしかりつけなくて、繰り返し教えて納得させることが大切であるということ。子どもに対する教育の心得をいったもの。

保護者に伝える諺であるが、保護者達は忙しく、時間に追われている感が否めない。結構イライラしていると思う。その様な中で、子どもが一度教えてわからないと、大抵二度目には叱っている。「さっき教えたでしょ!」「この間教えたよね!?!」「何回いえばわかるの?(一回しか行ってないのに)」などは、よく聞こえてくる。子どもたちは、二度目が無いとなると、訊くことを辞めてしまう。子どもは未熟だし、失敗から学ぶものである。一度や二度の失敗で目くじら立てず、長い目で見てあげてほしい。二度教えることを意識してもらおうと格段に叱る回数が減る。叱るというより怒っている保護者のエネルギーも省エネになるし、親子共々少しは良い関係になるのではないか、そんなことを思いながら、この諺を伝えている。

<人間到る処青山有り>

大望を成し遂げるためには、どこで死んでもいい覚悟で、故郷を出て大いに活躍すべきだということ。「人間」は「じんかん」とも読む。人間=人の住む世界、世の中の意。

出典 ^{しゃくげっしょう}釈月性作の詩

これは、筆者が大好きな言葉である。小さい世界に自分を閉じ込めず、大きな世界に飛び出して、自分の夢をかなえるために努力してほしいという思いから、いろいろな子どもたちに伝えている。

大谷翔平選手はじめ、多くのアスリートが海外で活躍している。アスリートに限らず、日本国内外で自分の故郷を離れ、活躍している人は沢山いる。

自分の居場所を故郷に決めて悪いということではないが、もっと広い世界をみて、いろいろな経験を積むことで、人間性は豊かになるし、その結果として自分が成し遂げたいこと、夢も変わってくる。初志貫徹もちろん良いが、叶うか叶わないかで小さくまとめてしまうことは、自分の可能性を狭めてしまうことにもなる。子どもたちにはもっと積極的に、目の前の壁にぶつかってほしいと思う。

<人間万事塞翁が馬>

人生、幸せがいつ不幸の原因になるかわからないし、わざわいがいつ幸せの原因になるかわからない。わざわいも悲しむに及ばず、幸せも喜びには当たらないということ。単に「塞翁が馬」ともいう。

出典 淮南子

この諺は有名であるが、おそらく年齢の高い方の間でしか知られていないように思う。

淮南子に書かれている話は以下の通り。「昔、古い上手な老人が中国の北の方に住んでいた。その北には胡という異民族が住んでいて、国境に城塞があった。ある時その

老人の馬が胡の方に逃げて行ってしまった。この地では良い馬が多く、高く売れるので近所の人は気の毒がって老人を慰めに行った。すると老人はこのことが幸福にならないとも限らないという。しばらくして、逃げ出した馬が、胡の良い馬を沢山連れて帰って来た。近所の人たちは祝いを言いに行くのだが、老人は首を振って、このことが禍にならないとも限らないと言った。しばらくすると、老人の息子がその馬から落ちて足の骨を折った。近所の人が見舞いに行くと、このことが幸福にならないとも限らないという。一年たったころ胡の異民族たちが城塞に襲撃してきて、何とか戦いには勝ったものの、若者の多くは戦いに行き死んでしまった。しかし老人の息子は足を負傷していたので戦いに行かずに済んだ。だから、何が幸福で何が不幸かは直ぐに決まるものではない。」

幸せや喜びが沢山あったほうがよいのは当然だが、幸せや喜びがずっと続くことはまずない。人生は山あり谷ありで、良い時も悪い時もある。良い時を喜びすぎれば、悪い時が更に悪く感じるし、悪い時が来るのが怖くなる。良い時の後には悪い時も来るからあまり喜びすぎず、悪い時の後には良い時も来るからあまり悲嘆しすぎず、ほどほどに生きていくと人生が少し楽になる。ジェットコースターのような上り下りは平穏とは言い難い。波は出来るだけ小さめがよい。

また、幸せと思っていることも実はその陰に不幸が隠れていることもあるし、不幸と思っている陰に幸せが隠れていることもあるという意味でも使う。特に、不幸ばかりが続くと嘆いている人に、何が不幸で何が

幸せかはわからないという意味でこの諺を伝えることもある。

＜忍の一字は衆妙の門＞

忍耐することこそ、あらゆることを行う上でも出発点であり、成功させる元であるということ。衆妙の門＝すべてのすぐれた道理の入り口の意。「ならぬ堪忍するが堪忍」は類語。 出典 呂本中―東萊集

耐えること、忍耐については、文明が発達する中で、どんどん弱くなっていると感じる。滝に打たれたり、寒中水泳、我慢大会など、イベントとしては我慢する、耐えるものはある。アスリートは厳しい練習に耐えなければ、自分の成長に繋がらないということはあるが、一般の人にとっては余り耐えることが無くなった。寒ければ暖房を入れ、ダウンジャケットを着こみ、ホッカイロを使う。暑ければ冷房をかけ、クーラー機能付きのジャケットを着たり、首にかけ扇風機などと使ったりする。学校に行く子どもたちも、雨や雪が降れば車で送り迎えしてもらう。学校内も教室にクーラーが設置され、温暖化による暑さ対策がなされてきた。

常に電気があり、蛇口をひねれば水が出る生活の中で、貧富の差による違いはあるが、ほとんどの人が文化的生活を営んでいる。筆者も、エスカレーターがあれば使い、北海道にいる関係で車を使うことも多い中、寒さ、暑さに対する耐性は落ちていると思う。地震や災害で電気やガス、水道が止まって初めて、そういうもののありがたさを感じるが、通常の状態に戻ってしまうと忘れてしまう。

そのような中で、何かを達成したいと思う時、忍耐力は必要である。ずっと順調に行くことなどない。上手くいかない時期を乗り越えなければ成功には届かないのだが、上手くいかないとすぐ諦めてしまう。それを繰り返していても、結局成功は得られない。宝くじに当たるように、大したこともせずに成功が降ってくるわけではない。

何かを成し遂げるには、それなりの努力と我慢が必要である。それが面倒だから何も目標を持たない、成し遂げたいと思わない子も多くいるのも事実で悲しい話だが、それでも何か、一つでも、小さくても目標を持っている子がいたら、この諺を引っ張り出して、忍耐の大事さを伝えている。

＜猫に鯉節＞

過ちが起こりやすい状況。危険な状況にあることのたとえ。猫のそばに好物の鯉節を置いたのでは、油断がならないことから。「盗人に蔵の晩」「盗人に鍵を預ける」なども類語。

ある小学生が、母親のお財布からお金を抜いて対戦カードを買った。こんな話はあちこちで聞かれる。中学生でも同様だ。抜き盗られる金額も年々大きくなって、数万から数十万と、よくそんなに盗られるまで気づかなかったものだと感心することもある。

そんな中、ある母親が、子どもが財布からお金を抜き取ることに気づき、叱責した後、わざとお金を盗り易い状況にしたと話してくれた。なぜそんなことをするのかと聞くと、「目の前にお金があっても自分で盗らない様、衝動を抑えられるようになるための

訓練だ」という。しかし、その子はADHDの診断を受けていて、投薬はなく、目の前のお金に対する衝動を自分でコントロールすることはできない。それをわかっているはずなのにである。確かに、自分でそういう衝動を抑えられるようになったら素晴らしい。しかし何度も失敗し、その度に叱責され、自己評価を下げて二次障害になるほうが、その子にとっては問題である。「猫と人間の子どもを一緒に扱う話ではないが、猫の前に鯉節を置けば、いくら叱っても食べるだろう。衝動性をコントロールすることは、大人でも難しい。まして未熟な小学生にそんな高い要求をしても、失敗するだけで、その度に非難や叱責を受けさせるのは、その子にとって良くない」と何度も説明して、お金を盗り易い状況に置くことを辞めてもらった。

子どもたちは、結構家の中のどこに何があるか、見ている。母親のへそくりや、〇〇のためにと避けておいたお金のありかに気づいてしまう。家探しをする子もいる。お金を盗る行為そのものをさせないように、親が気を付けていくこと、お金だけではなく、人の物をたとえ親子であっても、勝手に使わない、もっていかないことは、家庭の中のルールとしてあった方が良さだろうし、その中にお金があるというのが自然ではないかと思う。

猫の前に鯉節を置いたり、犬の前に肉を置いて、食べるなという方が残酷であると同様、目の前に盗れるようにお金を置くのは、しつけや訓練というには遠いように思う。

英語では・・・

He sets the fox to keep the geese.

(狐にガチョウの番をさせる。)

<鼠壁を忘る壁鼠を忘れず>

加害者は害を加えたことを忘れるが、被害者はいつまでも覚えていて恨み続けるといふことのたとえ。鼠は以前にかじった壁のことなど忘れていますが、壁についたかじった跡は消えないことから。

これはいじめの被害・加害の話の時に使っている諺である。いじめた側というのは、からかい程度のこともあるし、そんなに大事にとらえていないことも多く、そのことが余程大事になって加害者として大きな罰を受けていない限り、いじめたことを忘れてしまう。特に何年も経ったら覚えていないのが殆どである。

しかしいじめられた側は、どんな小さな事であっても昨日のここのようにはっきりと覚えているものだ。

ある50歳近い男性が、中学時代に女の子が落としたハンカチを拾ってあげたら、まるで汚いものでも見るような顔で、汚いものを掴むように拾われたハンカチをつまみ、ありがとうと言わなかったといっていた。以来女性恐怖症が何年も続いた。これも今で言えばハラスメントである。

また、ある40代の女性は、小学2年生の時、教室で担任からいわれのない叱責を受け、それをきっかけに、周りの児童から馬鹿にされるようになった。今でもその先生のことは恨んでいると言っていた。

小学校時代のいじめや嫌がらせ、からかい、或いは先生からのひどい扱いなど、今ではハラスメントとして問題になるような対

応なども含め、筆者のところに来る相談者が、被害者として語る話は多い。それらのことについて、加害者となる子どもや先生たちはどれだけ覚えているだろうか？ほとんどの子どもや先生方は覚えていないのだ。

しかし、いじめられた側は、絶対に忘れないのだ。そのことを加害者にあたる人たちにわかってもらわないと、いじめ指導は終わらない。人の恨みというのは根深く、そう簡単にはなくなる。

壁に空いた穴も、たとえ埋めて修理したとしても、そこに穴があったことは記憶に残っている。

この諺は、いじめ加害の指導に使えるが、スクールカウンセラーがいじめ加害者に係ることが少ないので、あえて挙げさせてもらった。

＜寝る子は育つ＞

よく寝る子は健康で丈夫に育つということ。「寝る子は息災」は類語。

これは、昔からよく使われている諺だが、人間いくつになっても睡眠は大事である。大人であっても睡眠は脳のためにも必要である。しかし近代の人たちは睡眠時間が少なめである。それは子どもたちにも言える。

勿論早く寝かせている家はあるが、小学校低学年で夜11時12時まで起きている子も結構いる。特にYouTubeやゲームが寝る時間を減らしている。

子どもの場合は寝ている間に脳が成長するので、その話を保護者にしているし、大人の場合も、寝る事が脳の記憶整理やエネルギー充填に役立っているのだと伝える。子

どもでも大人であっても寝る子は育つのである。

＜喉元過ぎれば熱さを忘れる＞

苦しいことも過ぎてしまえば簡単に忘れてしまうことのたとえ。また、苦しいときに受けた恩を、楽になったときに簡単に忘れることのたとえ。

「喉元通れば熱さを忘れる」ともいう。江戸いろはがるたの一つ。

嫌なこと、苦しいことをいつまでも覚えていられるのも苦しいし辛い話で、なるべく流していきたい。しかし苦しい時に思った大事なことは忘れずにいたいものだ。

例えば、災害に遭ったとき、普通の生活に戻ったら避難バッグを用意しておこう、棚が倒れないようにつっぱり棒をしっかりとつけようなどいろいろ思うものである。しかし、いざ普通の生活に戻ると日々の生活に流され、そんなことは忘れてしまう人も多い。まだ、喉元を通り過ぎないうちに、熱さを忘れないうちに行動すれば良い話である。

或いは、自分が辛い時に支えてくれた人のことを忘れ、その人が辛い時に恩返しをしないというのも冷たい話だろう。自分に大したことができなくても、気持ちだけでも、恩を受けた人には恩返しができること、それが人情だろう。人と人との関係性を良い状態に維持する秘訣にもなる。

これは子どもたちの社会でも言える。いじめられていた子を助けたと思ったら、その助けた子のせいでいじめられることになったとしたらどうだろう。助けられた子がしっかりと恩を返せる子であるなら、たと

えいじている子に齒向かうことができなくても、助けてくれた子に寄り添い、心の支えになることはできるはずである。或いは他の大人や周りの子に助けを求めることもできるはずである。助けるために出来ることをする、それが恩返しになる。

自分さえよければそれでよいという自分勝手な人が恩返しを忘れるわけではないだろう。自分の辛かったことは早く忘れたいから、その時恩を受けた人のことも一緒に忘れようとしてしまうのかもしれないが、受けた恩はきちんと返すようにしたいものである。そんな意味で、子どもたちや大人にこの諺を伝えている。

英語では・・・

The danger past and God forgotten.
(危険が過ぎると人は神を忘れる。)

Vows made in storms are forgotten
in calms. (嵐の時の誓言は凪になると忘れ去られる。)

出典説明

釈月性の詩・・・「^{とうゆう}将に東遊せんとして^{へき}壁に題す」の一節。

月性は幕末の僧で、周防の出身。二十七歳の時、大阪の漢学者篠崎小竹のもとで勉強するため、故郷を出る際に作った詩である。月性は攘夷論者としても活躍し、幕末の志士たちに大きな影響を与えた。そのため明治以降、この漢詩は立身を夢見て故郷を後にする青年の送別の席などでよく吟じられ広く知られるようになった。

淮南子・・・内編二十一卷

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は前漢の高祖劉邦の孫である^{わいなんおう}淮南王劉安。無為自然の道家思想を中心とし、政治・軍事・天文・地理などにわたって諸学派の説を収めている。内編二十一卷・外編三十三卷があったとされるが、現存するのは内編二十一卷。

呂 本中・・・

宋代中国の学者・士人。字は居仁。紫微と号し、東萊先生と呼ばれる。呂公著の曾孫。呂希哲の孫。呂好問の子。著作に「春秋集解」三十卷「東萊詩集」二十卷などがある。

参考文献：以前にも掲載したが、此処に載せている故事・諺及び出典説明は「新明解故事・ことわざ辞典」三省堂編修所編 より転載させていただいている。